

父の死から気付いた税の大切さ

名古屋市立供米田中学校

3年

私の父は、脳卒中で突然亡くなった。あまりにも急なことで、今でも信じられていないぐらいだ。朝まで元気だったのに、昼前に倒れ、病院に救急搬送された。病院に運ばれた父は集中治療室に入り、医師や看護師の方々が懸命に処置をしていたのですが、最先端の医療機器や技術を用いても、父の意識は戻らなく、7歳の弟と15歳の私、そして母を残して天国へと行ってしまったのです。

葬儀のあと、母と一緒に医療費の明細を見て、私は驚いた。高額な治療費のほとんどが公的医療保険によって支払われていたからだ。私たちが支払ったのは全体のごく一部だった。救急車の出動、病院の医師や看護師の働き、医療機器や薬などの全てを支えていたのは税金と保険制度だった。私はこの出来事を通して、初めて「税金の本当の意味」に気付いた。それまでは、税金といえば「取られるお金」「負担になるもの」というイメージしか持っていなかった。けれど、父の死をきっかけに、税金が人の命や生活を支えるために使われていることを、実感して理解をした。父の死後、私たちの家族は今後の生活に不安を感じていた。なぜなら、父は家族の中心であり、主な収入源だったからだ。しかし、市役所で相談すると、遺族年金や教育支援制度があることを教えてもらった。それらの制度もまた、税金によって支えられている。父を失った悲しみの中で、社会が私たち家族を支えてくれていることを実感した。

税金は、病気や事故、災害など、予期せぬ困難に直面したときに、私たちを支えてくれる「見えないつながり」なのだと思う。私たちの暮らしの中には、沢山の税金による支援がある。学校や道路、警察、公共交通、介護施設など、日常の中に当たり前のようにあるサービスの多くが、税金でまかなわれていることを知った。きっと、父が生きていたころ、沢山の税金を納めていたのだと思う。父が払った税金は、どこかで誰かを助けていたのかもしれない。そして今、私たちがその助けを受けている。このように税金は、ただの「お金」だけでなく、支え合うために必要なものなのだと思う。

これから私は大人になり、社会に出て働くようになる。そのときには、自分も税金を納める立場になる。けれど私は、税金を払うことをただ「取られるもの」だとは思わずに、「誰かの命や生活を支えるためのもの」だと考えたい。あの日、父が残してくれた思いとともに、税の意味を忘れずに生きていきたいと思う。